



新たな誓い

近藤多恵

「せんせい、おはよう」

黄色い帽子に黄色いカバンを肩から下げ、スモック姿の子どもたちが私に向かって元気に駆けてくる。

「おはよう」

迎える私の声も自然と弾む。

ここは、かつて私自身通っていた保育園。先生方にご指導をいただきながら、実習生として過ごした2週間も、いよいよ今日が最終日。おぼろげな記憶をたどると、登園して先生の姿を見つけると、嬉しくてこんな風に駆け出していたものだったと、幼かった頃の自分を重ね、不思議な感動に包まれてしまう。

いま思えば、私が初めて保育士を

夢見たのも、丁度この頃であつた。

オルガンを上手に弾きながら歌を歌ったり、お昼寝の時間、なかなか眠れずにいると、傍らに来て胸元を優しく叩いてくれたり、帰りの支度の後、絵本を読んでもくれる先生の姿は、私にとっては憧れであつた。

私は今、大学で保育について様々な事を学んでいる。子育てに悩む母親への支援や父親の子育て参加について学ぶ「子育て支援論」、子どもの遊びの意義を学ぶ「生活と環境づくりや指導方法を学ぶ」、生活と表現」。子どもの発達を基盤に、ダウン症や脳性マヒ、注意欠陥障害をもつ子どもについて学ぶ「発達心理学」などである。

とりわけ子育て支援論には興味深いものがある。思い起こせば、私が



た え

近藤多恵さん(榎前町・20歳)

新成人を対象に募集した「はたちの願い」作文で優秀賞を受賞。(本紙23ページ参照)

二十歳の節目に、子どものころから抱きつづけていた保育士になりたいという気持ちをもう一度見つめなおそうと思い、今回、応募してみました。

2週間の実習では、現場で実際に子どもたちと接することで、大学で学ばただけでは得ることのない、貴重な体験をたくさんすることができました。

今までは、本を読んだり、勉強したりと、内側にこもっていることが多かった、わたしですが、二十歳を機に、

今後は、ボランティアや様々な現場に足を運んで、もっと外側に向かって積極的に活動していきたいです。



幼かった頃、大好きな友達や優しい先生に囲まれて過ごす園での一日は、もちろん楽しかったが、降園の際に出迎えに来てくれている大勢の母親たちの中に、自分の母親を見つけた時の喜びは、今も深く脳裏に焼き付いている。私がそうだったように、子どもにとって母親は、何よりも慕わしい存在なのだ。だからこそ、母子ともに支援する事が求められるのだと思う。

核家族化に伴い、子育てに関する悩みや不安を打ち明けられる相手がいないことや、児童虐待から見えてくる母性喪失の問題など、様々な気持ちの揺れのなかで、母親は育児に取り組んでいる。このような母親の気持ちに寄り添い、共に悩みながら問題解決へと向かって行けるような保

育士になれるよう、これからたくさんさんの事を学んでいきたいと思っている。

「多恵先生が保育園に来るのは、今日が最後です。一人ずつ先生と握手でお別れしようね」

実習最終日という事で、先生方と子ども達がお別れ会を開いてくれた。子ども達、一人ひとりと握手をしながら、この2週間を振り返り、熱いものが込み上げてくる。

「せんせい、明日は来ないんだよね...」

年長の女の子が、こう言って小さな右手を差し出してくれた。私は、その子の手を握り返しながら心の中で誓った。

「今度は、本物の先生になって、この園に帰ってこよう」と。